

OCT 装置 AptiVue 使用時に側枝自動検出機能の誤認識を経験した一例

【初めに】2019 年 4 月に OCT 装置ソフトウェアを AptiVue (E. 5) へバージョンアップし、ステントエクспанション機能のテーパーリファレンスモードを使用した際、挿入されていたガイドワイヤーの影に側枝が隠れてしまい、側枝検出機能が正常に作動しなかった症例を経験したので報告する。【症例】59 歳男性、2018 年 7 月に AMI にて LAD へ PCI 施行、8 か月後フォローアップ造影にて RCA に病変を認めたため PCI となった患者。【経過】OCT 施行時に側枝がガイドワイヤーの陰に隠れており、テーパーリファレンスの側枝検出機能が正常に作動しなかった。そのため、エクспанションインジケータは水色(拡張十分)表示となった。再度 OCT 施行したところ、ガイドワイヤーの位置がずれ、側枝検出機能が正常に作動しエクспанションインジケータが赤(不十分拡張)の表示を示した。【考察】ガイドワイヤーの位置がずれる事は稀であるが、血管径にかかわらず側枝はガイドワイヤーの陰になり見えない場合がある。そのため、この機能の結果を 100% 信じての PCI は不可能であり、ある程度、指標としての使用が望ましいと考える。また、この機能を使用する場合はアンギオ同期を行い側枝の有無の把握が重要と考える。【結語】新機能は直感的にステントの不十分拡張を認識でき、有効な指標になる。しかし 100%信頼出来るわけではないため、多機能と組み合わせることで有用性が向上する。また経験による部分も多いため、ある程度の経験が必要である。